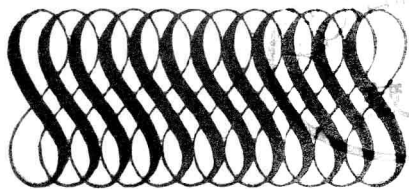
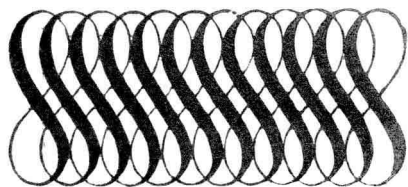


ヘミングウェイ
武器よさらば
われらの時代に/他

大橋吉之輔 宮本陽吉訳



世界文学全集Ⅱ—21 ヘミングウェイ

昭和42年1月10日初版発行

昭和42年12月15日再版発行

定価 四八〇円

訳者 大橋吉之輔

宮本陽吉

発行者 河出朋久

印刷者 堀 鉄判

装幀者 亀倉雄策

製本 印刷 株式会社文弘社
文勇堂製本工業株式会社

製函 富高紙器

本文用紙 国策バルプ工業株式会社

同納入 東邦紙業株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

同納入 株式会社小島洋紙店

発行所

東京都千代田区 株式
神田小川町三の六 会社

河出書房

電話 東京 (292) 大代表三七一一・振替口座東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。



© 1967

目次

武器よさらば

われらの時代に

短編

白い象のような山々

きれいな、照明のきいた店

死者の博物誌

父と子

解説

イタリア戦線カポレットの戦い

「武器よさらば」参考地図

年譜

武器よさらば

大橋吉之輔 訳

G・A・ブライファールに

主要人物

フレデリック・ヘンリー アメリカ人。第一次大戦にイタリア軍に参加し、イタリア戦線で傷病兵運搬の任にあつた中尉。任務遂行中に脚部を負傷。看護婦キャサリンと熱烈な恋愛をする。退却時の混乱に乗じて戦線を離脱。キャサリンとスイスへ逃避する。キャサリン・バークレイ 婚約者を戦争で失つて特志看護婦になったイギリス人。フレデリックに会い、恋愛する。

リナルディ イタリア人の軍医中尉。フレデリックの親友。

ヘレン・ファーンガスン スコットランド生まれの看護婦。キャサリンの親友。いつも行動をともにしている。

ミス・ヴァン・キャンペン フレデリックが入院したミラノのアメリカ軍病院の厳格な看護婦長。

ミス・ゲイジ 同病院の親切な看護婦。

ビアーニ

アイモ

ボネルロ

フレデリックの部下のイタリア兵で退却を共にする。

第一部

第一章

その年の夏の終わりごろ、ぼくたちは、川と平野の向こうに山々が見える村の、ある家で暮らしていた。川床には、日にあたって白く乾いた小石や丸石があり、いくつかの筋にわかれて流れている水は、澄みきって青く、その流れは早かった。家のそばの道を、部隊が通りすぎていったが、彼らのまきあげる埃は、木々の葉を白くまぶしていた。木々の幹もまた埃におおわれ、その年は葉の落ちるのが早く、ぼくたちの目のまえを、部隊は行進していき、埃がまいあがり、微風にゆさぶられて葉は落ち、兵士たちが行進していったあとの索漠とした白い道筋には、落葉しかなかった。

平野には作物がゆたかにみのり、果樹園の数も多かったが、平野の向こうの山々は、茶色の肌をむきだしている。そ

の山のなかでは戦闘がおこなわれ、夜、砲火の閃光が見えた。暗やみのなかで、それは夏の稲妻のようだったが、夜気は涼しく、嵐がくるような感じはなかった。

ときどき、窓の下の暗やみのなかを、部隊が行進していき、大砲が牽引車に引かれて通りすぎていくのがきこえた。夜は往来がはげしく、あちこちの道を、荷鞍の両側に弾薬箱を背おった多くの騾馬や、兵士をはこぶ灰色のトラックや、積荷にキャンバスをかけて往来のなかをのろのろと進むほかのトラックがひしめいていた。昼間、牽引車に引かれて通る巨砲もあったが、その長い砲身は緑の枝でおおわれ、牽引車にも緑の葉のついた枝や蔓がかぶせてあった。北のほうには、溪谷があり、それをずっと見たところ、栗の木々の林が見えるが、その背後、川のこちら側に、もうひとつの山がある。その山をめぐる戦闘もあったが、それは成功せず、秋になって雨季がくると、栗の木の葉はすっかり落ちて、枝は裸になり、その幹は雨に濡れて黒かった。果樹園のぶどう畑も、裸の枝をむきだしにやつれはてた姿となり、この地方ぜんたいが、秋のおとずれとともに、濡れそぼち、茶褐色をおびて、生気を失なってしまった。川のうえには霧が、山には雲がたれこめ、トラックは路上に泥をはね散らし、マントをかぶった兵士たちは泥まみれになって濡れていた。彼らの小銃も濡れている。マントの下ベルトの前部には、草の弾薬箱が二つずつついているが、挿弾子でつながれた、細く長い六・五ミリの小銃弾がびしりつめこまれて重いその灰色の草の弾薬箱は、マントの前をふくれあがらせ、

道を行進していく兵士たちの姿は、まるで妊娠六か月の妊婦のように見えた。

非常な速度で通りすぎていく小さな灰色の自動車が何台かあったが、たいてい、運転手のとなりに将校が一人、後部の座席に数人の将校がすわっている。そのはね散らす泥は、軍用トラックよりもさらにひどかったが、もし後部席の将校の一人が非常に小柄な男で、二人の將軍にはさまれてすわり、その男があまりにも小さいために顔は見えず、ただ帽子のてっぺんと細い背なかが見えるだけで、しかもその車がとくに速く走りすぎていくときには、それはおそらく国王だった。国王はウディネ（イタリア北東部、ユーゴスラヴィアの国境に近い町で、当時のイタリア軍司令部の所在地）に住んでいて、ほとんど毎日のように、戦況視察のためにこちらのほうにきていたが、戦況は非常にはかばかしくなかった。冬のおとずれとともに長雨となり、雨といっしょにコレラが発生した。しかしコレラはくい止められ、けっきょく、コレラで死んだものの数は全軍で七千人だけだった。

第二章

翌年には、多くの勝利があった。溪谷の向こうの、栗林のある山腹の背後の山は占領され、南のほう平野のかなたの台地でもいくつかの勝利があつて、八月には、ぼくたちは川をわたり、ゴリツィア（ウディネよりも、さらにユーゴ国境に近い町。一九一八年までオーストリア領下にあり、大戦中、町を

めぐる攻防はげしかった）のある家に移った。塀にかこまれた庭園のなかには、泉水があり、多くのこんもりとおい茂った樹木は日かげをつくり、家の壁をうす藤は紫の花を咲かせていた。戦闘は、いまは、向こうのとなりの山々でおこなわれていたが、そこは一マイルとはなれていなかった。町はとてもすばらしく、ぼくたちの家も非常に気持ちよくなった。家のうしろを川が流れ、町はとても手ぎわよく占領されていたが、町の向こうの山々は奪取することができず、ぼくには、戦争が終わったらオーストリア人たちはいづれこの町にもどってきたがつているようすなのが、とてもうれしかった。彼らは、戦略的な砲撃をわずかに加えるだけで、町を破壊してしまうような砲撃はいっさい遠慮しているのだ。住民は町での生活をつづけ、横町には病院やカフェや砲兵隊があり、また、兵士用と将校用の慰安所がそれぞれ一軒ずつあった。夏の終わりとともに、涼しい夜がつづくようになり、町の向こうの山では戦闘がおこなわれ、鉄橋には砲弾の炸裂した痕あとのこり、戦闘のあった川のほとりのトンネルはつぶれたままだったが、町の広場のまわりには木立がならび、広場に通じる並木道は遠くまでのび、そうしたなかで、娘たちの姿が町なかで見かけられるようになり、自動車にのって通りすぎていく国王も、いまは、その顔や、細長い首の小さな体や、山羊のあごひげのような白いあごひげなどが、ときどき見られるようになった。そして、そういったうちにも、砲弾の炸裂によって壁を失った家々の内部が、とつぜんその赤裸な顔をのぞかせ、その庭や、ときには街路にまで、くづれたしっくいや瓦

礫^{いし}がころがっていたが、こういういっさいのことが、カルソ
ー地方（アドリア海北岸のユー）の戦局がすべて有利に展開してい
ることとあいまって、その秋を、ぼくたちが田舎にいた去年
の秋とは非常にちがったものにしていた。戦争もまた変わっ
ていたのだ。

町の向こうの山のオークの木の林は、なくなってしまうて
いた。その林は、ぼくたちが町にやってきた夏には緑だった
が、いまは切り株や、裂けた幹や、めくれあがった地面がそ
こにあるだけだった。秋の終わりのある日、そのオークの林
があったあたりまでいったとき、雲が山においてくるのが見
えた。それは非常な速さでやってきて、陽光がにぶい黄色に
変わったかと思うと、すべてが灰色になり、空はおおわれて
しまい、雲はどんどん山をおりてきて、とつぜんぼくたちはそ
のなかにのみこまれてしまったが、それは雪だった。雪は斜
めに風を切つてふり、裸の地面をおおいつくして、切り株が
そのうえに頭をつきだした。大砲のうえにも雪はつもり塹壕^{えんごう}
のうしろの便所に通じるいく筋かの雪の小道ができた。

そのあと、下の町で、ぼくは将校用の慰安所の窓から、雪
がふるのを見つめていた。友人と二人で、一びんのアステイ
酒（イタリア北西部アステ）をそれぞれグラスについでのみなが
らすわっていたが、ゆっくりとふりしきる外の雪を見ている
と、その年の戦争はもうすっかり終わってしまったことがわ
かった。川の上流の山々はまだ占領されていないし、川の向
こうの山々の奪取もまだ成功していない。それらはみな、来年
にもちこされたのだ。ぼくたちの会食グループ（軍隊で食事を共
にするグループ）

（この）の従軍神父が、通りのぬかるみのなかを用心して歩き
ながら通りすぎていくのを見て、ぼくの友人は窓をたたき、
彼の注意をひこうとした。神父は顔をあげた。そして、ぼく
たちを見て、微笑をうかべた。友人ははいってくるようにと
合図した。神父は首を横にふり、通りすぎていった。その
夜、会食で、スパゲッティがすむと——みんなは、スパゲッ
ティをフォークでもちあげて、ばらばらになった端が宙ぶら
りんになってたれさがると、それを口のなかにおとしこんだ
り、あるいは、たえずもちあげながら口のなかにすすりこん
だりしながら、非常にすばやく真剣になって食べ、そのあい
まに、苞^{つつ}でつんだ長首のガロンびんからぶどう酒を勝手に
ついでのんだ。びんは金属製の籠^{かご}のなかでゆれうごき、人さ
し指でびんの首をひきさげると、赤くすきとおった、渋味の
あるすばらしいぶどう酒が、同じ手にもったグラスのなかに
流れこんでくるのだった——そのスパゲッティの料理がすむ
と、大尉は神父をいじめはじめた。

神父はまだ若くて、すぐに顔を赤らめる男だった。ぼくた
ちと同じように軍服を着ていたが、灰色の上衣の左の胸ポケ
ットのうえに、暗赤色のビロードの十字架をつけていた。大
尉は、ぼくに完全に理解できるように、一言も聞きおとすこ
とがないように、というまことにあやふやな口実で、片言の
イタリア語を話した。

「神父さん、きょう、女の子といっしょ」と大尉は、神父と
ぼくを見やりながらいった。神父は微笑し、顔を赤らめ、首
を横にふった。この大尉は、たびたび神父をいじめめるのだ。

「ちがう？」と大尉が訊いた。「きょう、ぼくは、神父さんが女の子といるの、見ている」

「ウソです」と神父がいう。ほかの将校たちは、その神父いじめをおもしろがって見ている。

「神父さん、女たちといっしょでなかった」と大尉はつづけた。「神父さん、女の子といっしょのこと、いちどもない」と大尉はばくに説明した。彼はぼくのグラスをとって、ぶどう酒をいっぱいついだ。そのあいだずっと、ぼくの目を見つめていたが、他方、神父からも目をはなしてはいない。

「神父さん、毎晩、一對五」食卓についている連中がみんなどっと笑った。「わかりますか？　神父さん、毎晩、一對五」大尉はある身ぶりをやって、大声で笑った。神父はそれを冗談とうけとった。

「ローマ法王は、オーストリア軍がこの戦争に勝つことを望んでるんだ」と少佐がいった。「法王はフランツ・ヨーゼフ（ハ三〇―一九一六、オーストリア国王）が好きなんだよ。そのへんから、金が出てるんだからな。ぼくは無神論者だ」

「きみは『黒衣の豚』を読んだことがある？」と中尉が訊いた。「こんど一冊もってきてあげよう。ぼくの信仰がぐらついたのは、あの本のおかげだった」

「あれはけがらわしい下劣な本です」と神父がいった。「あなただって、ほんとうはお好きじゃないはずです」

「あれはとても有益な本だよ」と中尉はいった。「例の神父連中のことがよく書いてあるからね。きみもきつと好きになるよ」と彼はばくにいった。ぼくが神父にはほえみかける

と、神父はろうそくの火の向こうからほえみかえした。「読んでだめですよ」と神父はいった。

「一冊きみにもってきてあげるよ」と中尉がいった。

「ものを考える人間は、みんな無神論者だ」と少佐がいった。「しかしぼくは、フリー・メイソン（世界の平和と人類愛を目標とする、秘密結社）は信じないがね」

「ぼくはフリー・メイソンを信じます」と中尉がいった。

「あれは高尚な団体ですよ」だれかがはいってきて、ドアがあいたとき、雪がふっているのが見えた。

「雪がふりだしたから、もう攻撃はないですね」とぼくはいった。

「うん、もうないな」と少佐がいった。「きみは休暇をとって、出かけたらいい。ぜひ、いつてこいよ、ローマだとかナポリだとかシシリイだとか——」

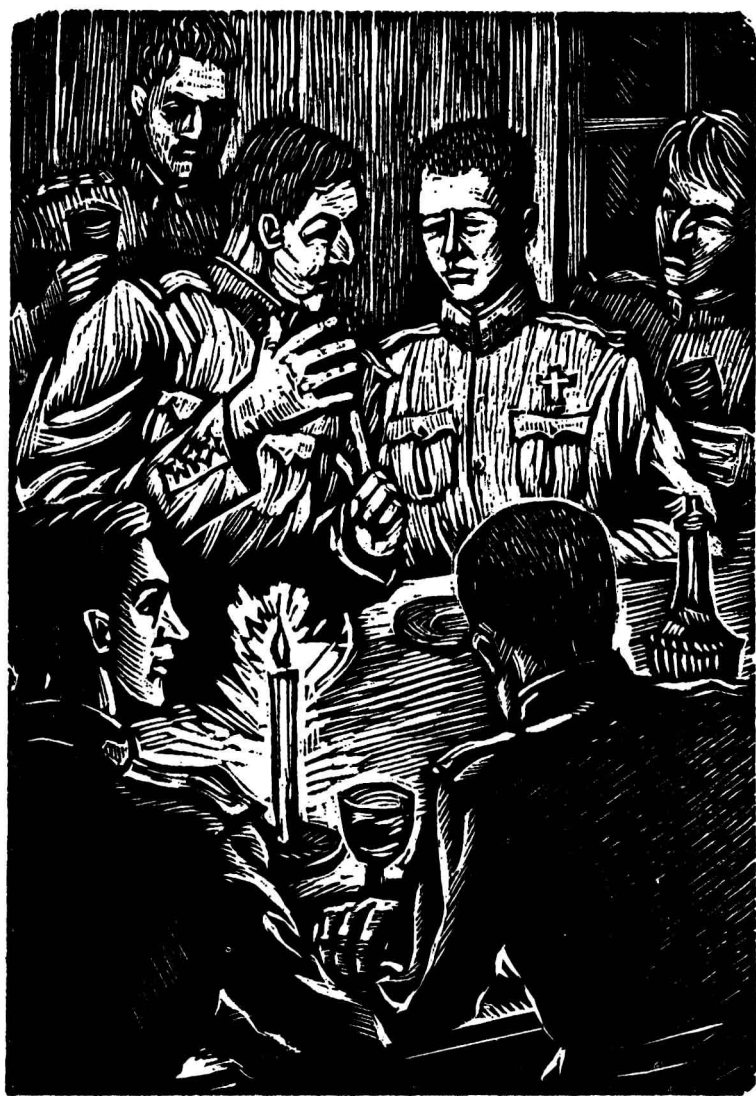
「アマルフィ（サレルノ湾にのぞむ）を忘れてはいけません」と中尉がいった。「アマルフィのぼくの家族に紹介状を書いてやるよ。まるで息子のようにかわいがってくれるぜ」

「バレルモ（シシリイの島）を訪ねるべきだよ」

「カプリ（ナポリ湾にある島）へはどうしてもいかなくちやな」

「アブルツツイを見て、カブラコッタのわたしの家族を訪ねていただきたいです」と神父がいった。（アブルツツイはイタリア中部の地方の名で、カブラコッタはそこにある町の名）

「そら、神父さんのアブルツツイの話がはじまったぞ。あそこは、ここよりも雪が多いんだぜ。この男は農民なんか見たくはないのさ。文化と文明の中心地だよ、いくべきところ



は」

「それに、きれいな女の子がいなくちゃいかん。ナボリのいろんなどこのアドレスを教えてやるよ。美人の若い娘たちだぞ——おふくろのお伴どもがついてるがね。ハ！ ハ！ ハ！」大尉は片手をひらき、影絵をつくるようなように、親指を立て、ほかの指をひろげた。壁に手の影がうつった。彼はまた片言のイタリア語でしゃべりはじめた。「きみは、出かけるときは、これ」彼は親指を指さした。「かえってくるときは、これ」彼は小指にさわった。みんなが笑った。

「いいかい」と大尉がいった。彼はまた手をひらいた。ろうそくの火が、手の影をまた壁にうつした。彼はまっすぐに立てた親指からはじめて、親指と四本の指を順序に名づけていった。「少尉（親指）、中尉（人さし指）、大尉（なか指）、少佐（くすり指）、それから中佐（小指）。きみは少尉として出かけていく！そして、かえってくるときは中佐！」みんなはどっと笑った。大尉は指のあそびに大成功をおさめていた。彼は神父の顔を見て、どなった。「毎晩、神父さん、一対五！」みんなはまたどっと笑った。

「すぐに休暇をとって、出かけろよ」と少佐がいった。「ぼくもいっしょについて、案内してやりたいなあ」と中尉がいった。

「かえってくるとき、蓄音器を一台たのむよ」
「いいオペラのレコードを買ってきてくれ」

「カルーツ（リアの有名なデナー歌手）をたのむ」

「カルーツはごめんだよ。あいつはどなるばかりだ」

「彼みたいにどなればいいと思わないかい？」

「あいつはどなるばかりだよ。どなってばかりいるんだよ！」
「わたしは、アブルツィにいていただきたいです」と神父がいった。ほかのものは大声でわめいていた。「狩猟がたのしめますよ。土地のものもお気に入りますでしょうし、寒いですが、空気はよく澄んでいて、乾燥しています。わたしの家にお泊まりになればいいんです。わたしの父は有名な獵師なんですよ」

「さあ、いこうぜ」と大尉がいった。「看板にならぬうちに、淫売屋へみんなでどつとくりこもう」

「おやすみなさい」とぼくは神父にいった。

「おやすみなさい」と彼はいった。

第三章

ぼくが前線にもどってきたとき、ぼくの友人たちはまだその町で暮らしていた。町の周辺一帯には、まえよりもずっと多くの大砲が配置され、春がきていた。田野は緑にもえ、ぶどうの木には小さな緑の芽がふきだし、道にそった並木も小さな葉をつけ、海のほうからそよ風がふいていた。ぼくは丘のあるその町をながめ、その丘よりも高く、向こうの丘陵のあいだのくぼみにあたるところに立っている古城を見た。丘陵の背後には山々があつたが、その茶褐色の山肌にも、わずか

ばかり縁がまじっている。町のなかでも、大砲の数はまえよりもふえ、新しい病院がいくつかで、街頭でイギリス兵や、ときにはイギリス婦人にも出会うことがあり、新しく砲撃をこうむった家も何軒あった。あたたく、春めいていて、扉からの日射しの照りかえしにあたたまりながら、並木のつづく狭い道を歩いてみると、友人たちはまだ同じ家で暮らしており、なにもかもぼくが出かけたときと同じようだった。ドアはあいていて、外の日なたのベンチに一人の兵士がすわり、側面のドアのわきには軍用救急車が一台待機しており、ドアのなかにはいっていくと、大理石の床と病院のにおいがした。すべてが、ぼくが出かけたときと同じだった。季節がいまは春になっているというだけだ。大部屋をのぞいてみると、少佐が机に向かつてすわり、窓があいて日光が部屋のなかにさしこんでいた。少佐はぼくの姿に気がつかず、ぼくは、はいっていつて報告したものか、それともまず二階にあがって旅のよごれを洗っておとそうかと迷った。ぼくは二階にあがっていくことにきめた。

ぼくがリナルディ中尉と二人で使っている部屋は、中庭に面している。窓はあいていて、ぼくのベッドは毛布をかぶせてきちんと整えられており、ぼくの所持品は壁にかかっていた。細長いブリキの箱にはいったガス・マスクと鉄かぶととが、同じ掛けくぎにかかっている。ベッドのすそのところには、ぼくの平たいトランクがおかれ、そのトランクのうえに、油で革がびかびか光っている防寒靴がのっている。焼きがはいって青い八角形の銃身と、美しい黒ずんだクルミ材

の、頬にぴたり合う狙撃兵用の銃床がついた、ぼくのオーストリア製の狙撃銃は二つのベッドのうえにかかっていた。それにとりつける照準望遠鏡は、ぼくの記憶では、トランクのなかにしまっているはずだった。リナルディ中尉はもうひとつのベッドで眠っていた。部屋にはいつてきたぼくの足音を聞くと、彼は目をさまし、起きあがった。

「おかえり！」と彼はいった。「休暇はどうだった？」
「すばらしかった」

握手をかわすと、彼はぼくの首に片腕をまわして接吻した。
「うう」とぼくは声を出した。

「汚ないなあ」と彼はいった。「洗わなくちゃだめだ。ところで、どこへ行って、なにをしてきた？ いますぐ、ぜんぶを話してくれ」

「あちこち、みんないつてきたよ。ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ウィラ・サン・ジョヴァンニ、メッシーナ、タオルミナ——」
（イタリア半島の北から南へ順序にならん）
「まるで列車の時刻表みたいな話だな。それで、ロマンスはなかったのか？」

「あった」
「どこで？」

「ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ナポリ——」
「もうたくさんだ。そのなかで、どこのがほんとはいちばんよかったか、話してみろ」

「ミラノだな」
「それは、そこが最初の町だったからだよ。女にはどこで会

「なんだ？ コーヴァ（ミラノの有名なカフェの名）かい？ どこへしけこんだ？ どんな気分だった？ あらいざらい、いますぐぶちまけろよ。オール・ナイトだったのか？」

「うん」

「そんなの、たいしたことはないさ。ここにもいまは、美人がいるんだぜ。前線にきたのはこれがはじめてというほやほやのがね」

「それはいいね」

「信じないんだな。きょう昼から、見につれてってやるさ。」

それから、美人のイギリス娘も、町にきてるよ。ぼくは目下、そのうちの一人ミス・パークレイに恋愛中なんだ。きみをつれてって、引き合わせてやろう。ぼくはたぶん、ミス・パークレイと結婚するようになるだろう」

「体を洗って、報告してこなきゃならない。いまはだれも仕事をしていないのか？」

「きみが出かけていってから、仕事といえば、霜やけ、凍傷、黄痘、淋病、故意の負傷、肺炎、それに硬性および軟性下疳（か）といったたぐいのものばかりさ。毎週だれかが岩のかけらで怪我（けが）してるな。ほんものの負傷もすこしはあるね。来週になると、また戦争がはじまる。いや、たぶんはじまるだろう。みんなそういつてるからね。きみはぼくがミス・パークレイと結婚するのはいいと思うかい——もちろん、戦争がすんでからのことだが？」

「ぜったい、いいよ」とぼくはいつて、洗面器に水をいっぱい入れた。

「今夜、なにもかもぜんぶ話してきかせろよ」とリナルディはいった。「ぼくはこれから、ミス・パークレイにさっそうたる姿を見せるために、もうひと眠りするからね」

ぼくは上衣とシャツをぬいで、洗面器の冷たい水で体を洗った。タオルで体をふきながら、部屋のなかや窓の外に目をやり、それから、ベッドに目をとじて横たわっているリナルディを見た。なかなかの美男子で、年齢はぼくと同じ、アマalfiの出身だ。軍医であることをよろこんでいて、ぼくとは大の仲よしでもある。見つめていると、彼は目をあけた。

「金をもつてるかい？」

「あるよ」

「五十リラ貸してくれ」

ぼくは手をふいて、壁にかけた上衣の内ポケットから紙入れをとりだした。リナルディはベッドに寝そべったまま、紙幣をうけとってそれをたたみ、ズボンのポケットにすべりこませた。それから微笑して、「ミス・パークレイに、金には不自由しない男だという印象をあたえる必要があるからね。きみはまさに、ぼくのこよなくき友で、財政上のバトロンドだよ」

「勝手にしろ」とぼくはいった。

その夜、会食のとき、ぼくは神父のとなりにすわったが、神父はぼくがアブルツィにいなかったことに失望し、急に気分をわるくしたらしかった。ぼくが訪ねていくという手紙を、彼は父親に書き、先方は準備をととのえて待っていたというのだ。ぼく自身も、彼と同じように、いやな気分にな

り、どうしていかなかったのか、われながら理解に苦しんだ。ほんとうはぼくもいきたかったのだ。つきつぎとそれをはばむような事情が重なったことを、ぼくは彼に説明しようとした。最後には彼もわかってくれ、いきたかったというのがぼくの真意であることを理解してくれて、どうやらことはおさまった。ぼくはしたたかぶどう酒をのみ、そのあとでコーヒートとストレীগ(甘いオレンジの香味をつけた黄色いリキユールの商品名)をのんでいたので、酔いにまかせて、人間はしたいと思ってることをしなないものだ、願っていることをやっただけではない、などと述べた。

ほかのものが議論しているあいだ、ぼくたち二人は話していた。ぼくはアブルツィへいきたかったのだ。だが、ぼくは、道路が凍てついて鉄のようになくなり、乾燥して澄みきった空気が冷たく、雪もかわいて粉のようになり、野うさぎの足跡が雪のうえに見え、農民たちが帽子をぬいで旦那さまと声をかけ、狼がぞんぶんに楽しめる——そういった場所にはどこへもいかなかった。そんなところへはいかないで、煙草のけむりのたちこめるカフェにたむろしたりしながら、街の夜におぼれていたのだ。部屋がぐるぐるするとまわりだし、それを止めさせるためには壁をじっと見つめていなければならぬような夜。酔いしれて、えたいの知れぬ女とベッドにもぐりこみ、これこそが人生のすべてだと思ひこみ、ふと目ざめてはかたわらに寝ているのがだれだかわからぬ異様な興奮を感じ、すべてが非現実と化した暗やみの世界で、つのる興奮に身をゆだねて、ふたたび、相手がだれともわから

ず気にもかけずに、夜のまきぐりをくりかえすほかに、これだけがすべてだ、すべてだ、すべてだと信じこんで、気にもかけなかった夜。それなのに、急にひどく気になりはじめて、眠りこんでは、朝ときどき気にかかって目をさまし、それまでそこにあつたものがあとかたもなく消えうせて、すべてが鮮烈無残な様相を見せ、ときには値段のことで言い争うこともあつた。ときには、まだ楽しさがのこり、甘えたわむれてぬくもりあい、朝食をとり、昼食をたべたこともある。ときには、すべての情感が枯れはてて、表の街路へ出ていくのがうれしいこともあつたが、だからといって、また同じ一日がはじまり、やがて同じ夜がやってくることにかわりはなかった。ぼくは、そういった夜のことや、夜と昼のちがいや、昼が非常に清潔で寒くないかぎり夜のほうがずっといい、といったようなことを説明しようとしたが、とても説明することはできなかった。いまでもそれを説明することはできない。しかし、自分で経験してみれば、わかることだ。彼はそれを経験したことがなかったが、ぼくがほんとうにアブルツィ地方へいきたいと思っていながら、そこへいかなかったことを理解してくれ、多くの共通する趣味をもっている親友というぼくたちのあいだにはちがいはなかった。だが、もちろん、ぼくたちのあいだにはちがひもある。ぼくの知らないことや、知ってもかならず忘れてしまふようなことを、彼はいつも知っていたのだ。しかし、あとになって気がついたといふものの、そのときのぼくには、そのことはわかっていなかった。いっぽう、ぼくたちはみんな会食の席についてい

て、食事は終わり、議論がつづいていた。ぼくたち二人が話をやめると、大尉がさげんだ、「神父さん、幸福じゃない。女の子がいない、幸福じゃない」

「わたしは幸福です」と神父はいった。

「神父さん、幸福じゃない。神父さん、オーストリア軍が勝つことをのぞんでる」と大尉がいった。ほかのものは耳をかたむけている。神父は首を横にふった。

「いいえ」と神父はいった。

「神父さん、われわれが攻撃しないことをのぞんでる。われわれに攻撃してもらいたくないんだろう？」

「ちがいます。戦争があれば、攻撃しなければならないと思います」

「攻撃しなければならない、だって。攻撃はかならずするとも！」

神父はうなずいた。

「よせよ」と少佐がいった。「彼はだいたいようぶだよ」

「いずれにしても、そのことについては、この男にはなにもできんですからな」と大尉はいった。ぼくたちはみんな立ちあがり、食卓をはなれた。

第四章

となりの庭にある砲兵陣地からの砲撃の音で、朝、目をさ

まし、窓に日が射しこんでいるのを見て、ベッドから起き出た。そして、窓のころへいって、外をながめた。砂利をしいた庭の小道はしめり、草は露に濡れている。砲撃は二度おこなわれたが、そのたびに爆風がはげしくおしよせてきて、窓をゆるがし、ぼくのバジャマの前をはためかせた。大砲は見えなかったが、ぼくたちの頭上ごしに発射していることは明らかだった。そんなところに大砲があるのは迷惑だったが、たいして大きなやつでないのが、せめてもの慰めだった。外の庭を見ていると、道路のほうからトラックが一台エンジンをかけている音が聞こえた。ぼくは服に着がえ、階下においていって、台所でコーヒースコッシュのみ、ガレージへ出ていった。

長い車庫のなかに、十台の車が横に一列にならんでいた。それらは頭でっかちの、鼻先がずんぐりした、軍用救急車で、灰色にぬってあり、つくりは引越貨物をはこぶ大型トラックに似ている。工兵たちが作業場に引き出された一台の修理をしていた。あとの三台は、山のなかの前線救護所にいった。

「あそここの砲兵陣地に、敵が砲撃をしかけてくることがあるかね？」ぼくは工兵の一人に訊いた。

「いいえ、中尉殿。あの小さな丘に守られていますからだいじょうぶです」

「景気はどうだね？」

「そうわるくはありません。この車はだめですが、ほかのはちゃんと動きますから」彼は修理の手を休めて、にっこり笑

った。「休暇をとられたんですね？」

「ああ」

彼は両の手をジャンパーでふき、にやりと笑った。「おたのしみだったでしょう？」ほかのものも、みんなにやにや笑っている。

「うん、羽をのばしてきたよ」とぼくはいった。「この車はどこがわるいんだ？」

「こいつはしかたのない車ですよ。つぎからつぎと故障つづきで」

「いまはどこがわるいんだ？」

「リングのとしかえです」

ぼくは修理をしている彼らのそばをはなれた。故障車は、エンジンをつけられ、部分品を作業台のうえに店びらきされ、ぶぎまですつろなかつこうに見えた。ぼくは車庫のなかにはいつていつて、車を一台一台点検してあるいた。どれも適度にきれいで、洗ったばかりのが二、三台あり、のこりは埃をかぶっている。ぼくはタイヤを注意ぶかく見てまわつて、裂け目や石傷がないかどうかを調べた。万事、コンディションは良好のようだった。どうやら、ぼくが責任者としてそこにいようがいまいが、差異はないらしい。ぼくはそれまで、車の状態や、部品や用具が入手できるかどうかということや、傷病兵を運搬して山中の前線救護所から仮収容所へひきさがらせ、つぎに彼らをそれぞれの書類に記載された病院まで送りどけるといふ任務を円滑に遂行することなどが、かなりな程度にまで、ぼく自身の手腕にかかっているものと

想像していた。だが、どうやら、ぼくがそこにいようがいまいが、問題ではないらしいのだ。

「部品を入手するのに、なにかやっかいなことがあったかね？」ぼくは工兵軍曹に訊いた。

「いいえ、中尉殿」

「いまはガソリン置場はどこにある？」

「まえた同じ場所です」

「よし」とぼくはいつて、家にもどり、会食のテーブルでもう一ぱいコーヒーをのんだ。コンデンス・ミルクがはいっているので、コーヒーはうすい灰色をおび、甘かった。窓の外は、美しい春の朝だった。日中はずっと暑くなるだろうことを予感させる、あの鼻腔の乾きが感じられはじめていた。その日、ぼくは山中の部署を巡回してまわり、午後おそく町へもどってきた。

ぼくの留守中に、すべての情況は有利に展開していたらしかった。攻撃が再開されるという話をぼくは聞いた。ぼくたちが所属している師団は、川の上流の一点で攻撃を開始することになっており、攻撃中の部署についてよく調査しておくようにと、ぼくは少佐から命じられた。攻撃軍はせまい峡谷の上流で川をわたり、丘の中腹に散開する。救急車の配置される部署は、できるだけ川の近くに位置し、かつ、遮蔽された場所でなければならぬ。もちろん、その部署の選定は歩兵隊がおこなうが、それ以後のことに関しては、ぼくたちが全責任をもって任務を遂行する方向にもっていかなければならない、というのだ。それは、なにか軍人になったような